

(「研究する」 2023年6月)

「私が研究する理由(3) ～データを活用した教育～」

学会発表等を通じて研究者の方と対話するようになり、ゼミを開催したり、共同研究させていただいたりする機会が増えると、実践者である私の立場は、大変恵まれているな、と感じるようになりました。教育研究の多くは学校現場のデータが必要で、協力校への依頼をはじめ、学校(生徒)の実態把握など大変な労力です。そういった点では、学校現場で直接管理職へ教育実践の提案と同時に研究論文の作成の許諾を伺うことができる、実践者のメリットを感じます。

さて、今回は、教育現場では、授業等実践を振り返り、教育効果や価値を見直すことが難しいことをお伝えしましたが、今回は「データ」を活用した教育についてお話ししたいと思います。

私はかつて国研の研究委嘱(魅力ある学校づくり調査研究)を受けた勤務校の研究主任を担当したことがあります。中学校区の小学校を含む4小中学校での不登校未然防止を目指した調査研究でしたが、約2000人の児童生徒を対象に、年間3回、「学校生活は楽しいですか」など8項目からなる意識調査を2年間行い、研究実践による変容を調査しました。

こうした調査やアンケートはどの学校でも頻繁に行われます。研究指定校ともなればますます多くなります。教員や研究者の視点では問題ないのですが、児童生徒の視点からすると、こうした意識調査は、その結果がどうであったのかを知ることは少なく、時間と労力を消費しただけのように感じています。

ごく私見であることを前提としてお話しすると…、学術研究・実践研究いずれにしてもこうした意識調査やアンケートの結果が児童生徒にフィードバックされるものであってほしいと考えます。少なくとも、研究の目的と調査方法が、子どもたちの学校生活を良くするためのものであること、研究結果や成果を調査対象全体のものであっても示す必要があります。しかし、できるならば…可能な限り、子ども一人一人にその結果がわかるような工夫があれば、回答への関心も高まり、学校サイドの協力も得られやすいのではないかと思います。

例えば…研究に関する意識調査結果を研究データとして回収しつつ、その結果をセルフチェックシートとして出力して児童生徒に届ける、といったものです。研究者としては完成されたものでなければならない、そう考えるかもしれませんが、子どもにとってはそうではない場合も多いです。実践者と協力してこうしたシートが1つでもあると実践者の先生も嬉しいでしょうね。やはりどちらにも win-win の関係であることは重要です。

同時に、実践者の視点として重要なのは、実践の場面でデータを活用することです。研究者ではないから…と授業や行事の振り返りを子どもが書いて先生がコメントする、だけでなく、そこに「データ」として結果を活用したいです。例えば、文化祭の実行委員会を通して身につけたい力と、活動を通して身についた力を数値化⇒グラフ化して、個と集団の様子を捉える。また複数回・経年の蓄積から活動の評価指標とする、等です。

これらは、20年前までならすべて数値も手入力膨大な時間と労力が必要でした。それが10年前(感覚ですが)にはマークシート処理になり、今では Google Form や Microsoft FORMS などアンケート作成アプリがあります。おそらく今後、手書き文字の認識能力も向上され、子どもの文字すら認識する時代が来るでしょう。そうなれば、従来のデータ処理にかかっ

(「研究する」 2023年6月)

ていた時間は比較にならないほど短縮され、リアルタイムに近い形で教育活動を捉えることが可能になっていきます。今までの「データ」の活用方法を私たちは考え直す時が来たのだと思います。

こうしたアプリの導入に加えて、セルフチェックシートの作成スキルを身につければ、研究協力の依頼…というだけでなく、教育活動へのご提案といったこともできるでしょう。その結果として、教育現場の研究に対する信頼性が改善され、協力しようとする学校も増えるのではないのでしょうか。

学校の先生たちは、より効果的で効率的な、良い教育方法を常に模索しています。研究者のノウハウと実践者のニーズを適合させることも、誰もが笑顔になる研究につながると考えます。

(愛知県みよし市立三好中学校 村瀬悟)